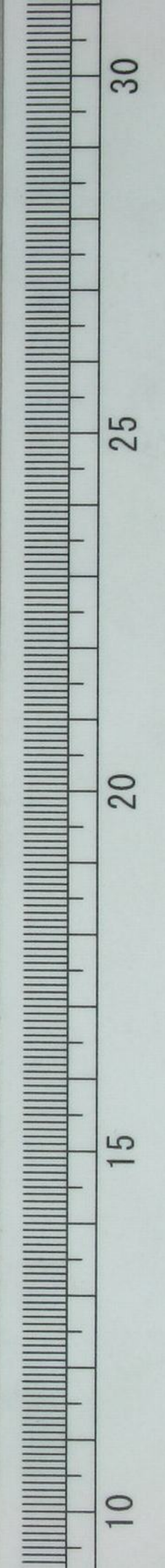


沼尻絳一郎編輯
西南太平記

十二号

上



A434
13

沼尻絰一郎編輯全二冊

西南太平洋記

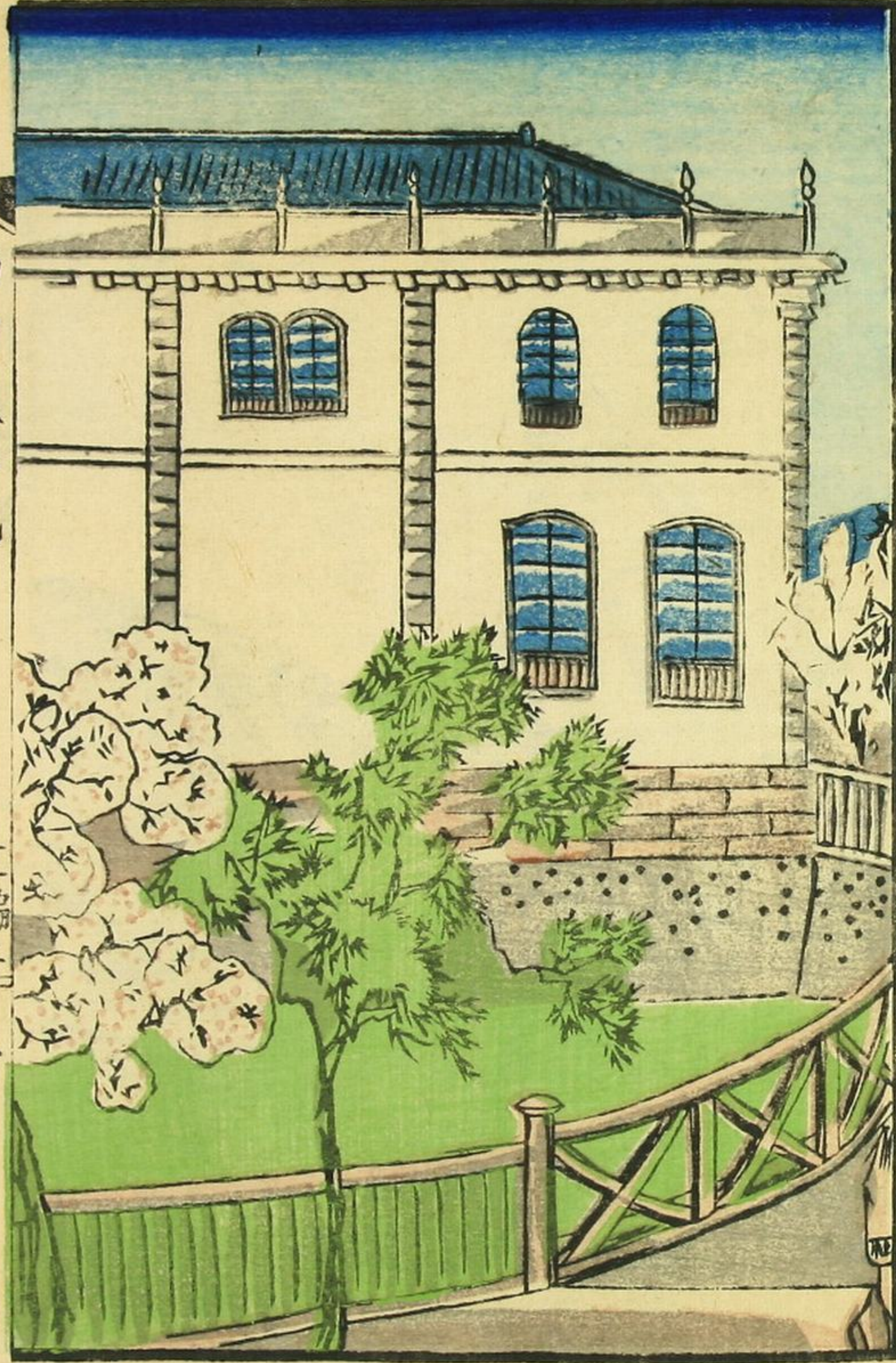
東京

萬笈閣發兌

无朝威勢
輝安乎

霞老山人

48-7796



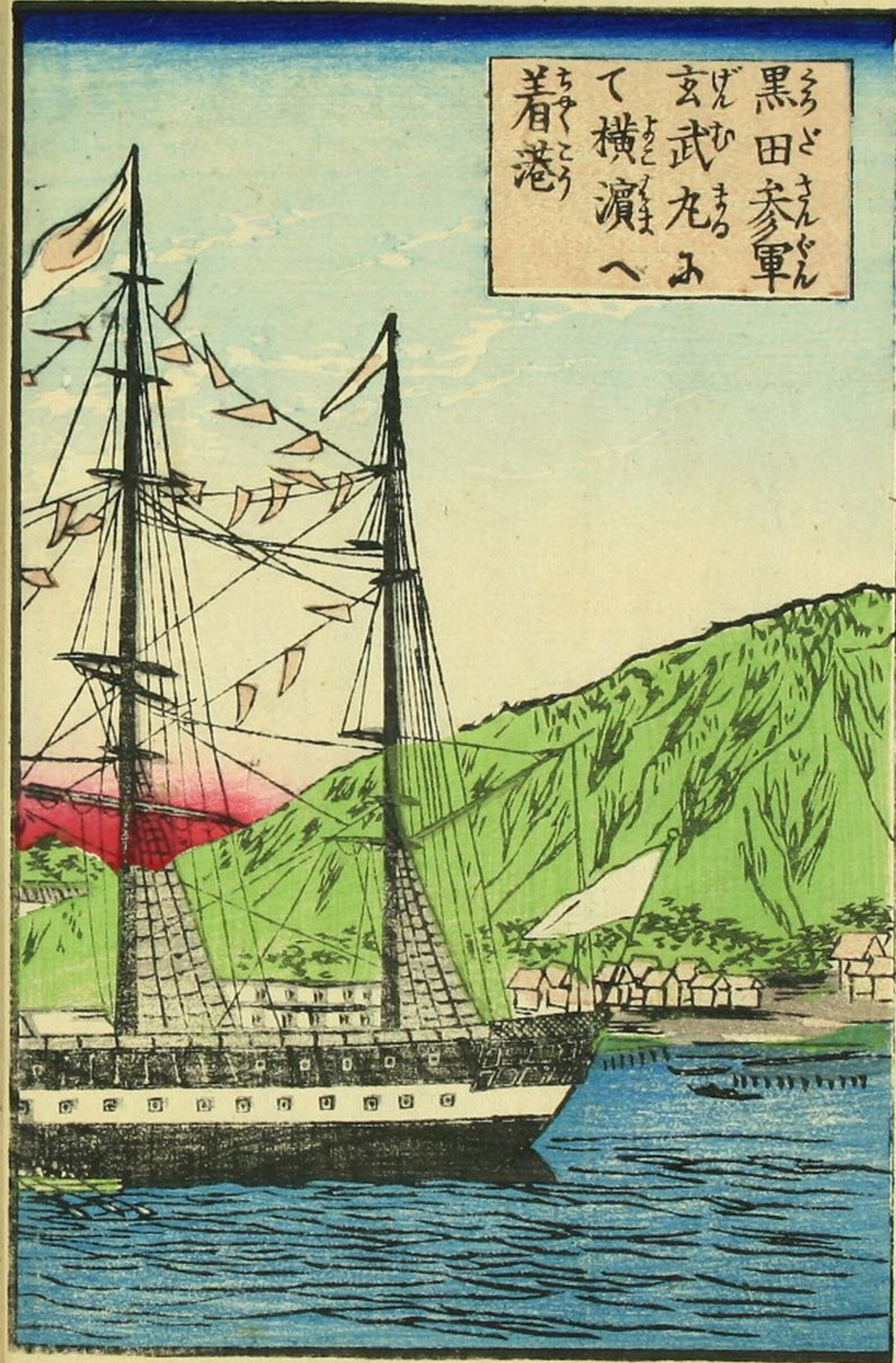
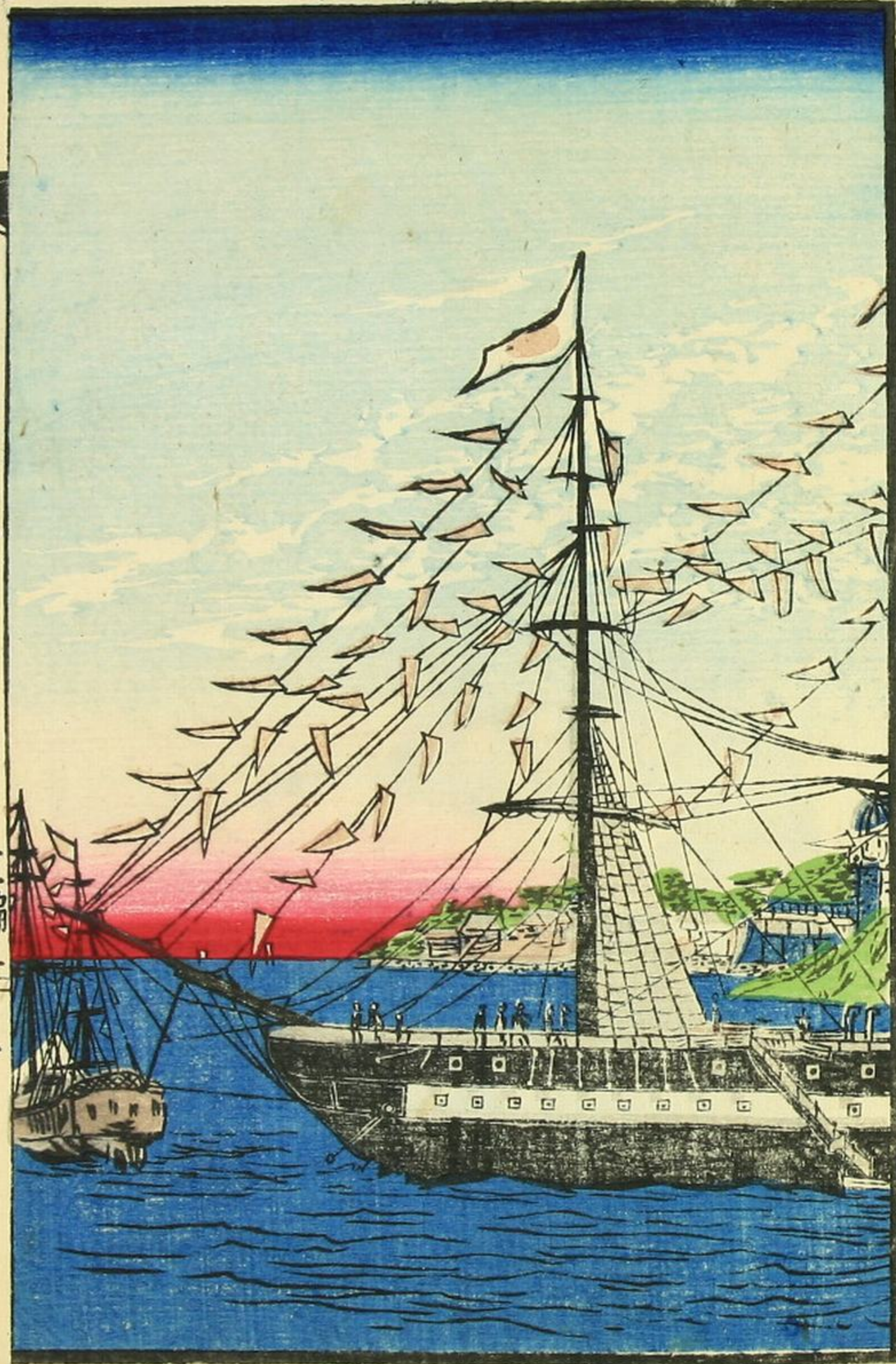
石の門

十一編上



大坂病院
へ御臨幸
の
之の
圖

西南太平記



黒田参軍
玄武丸
て横濱へ
着港

西南太平洋記

池邊吉十郎



西南太平記十一編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第廿一回

官軍日向路大激戦
千知木大尉高瀬に組す

方今鹿兒島の戦役ふかいて窺うふ此の感るべき度
能たざるなり何とあるを我が官兵の始トめて
兇鋒は接せしより已ふ其の戦闘の實況に至つ
て詳細に聞くと得ざるところなれども時々

電報及び道路の説ふ因る其の概畧を想像ま
れば官兵の精鍊勇剛ふして常ふ善く戦闘す
るに決して疑を容べからざるに似たり然り
とりんども逆軍も亦頗る慄悍の兇徒あり我
以て依然として尚その猖獗の勢と減せず或は
山路の危険に據り砲銃の亂射を為し或は
不意に間道より突出して短兵の接戦を試ま
る者往々尠むりとせず

蓋し兩軍ふ於ては數十回の進撃を重ぬると雖
も猶兇徒の追撃せらるる今般川尻口より長驅し
官軍の第一番隊熊本城に達したるに陸軍大佐
山川清ふと同氏の舊名を大蔵と云ひ頗る猛勇
の者なり

傳云山川大藏は幼年の頃より文武兩道を
勉強せられ元來活潑機敏なる生質なれ
ば早くもその道に熟せらるる既にして年齢

稍長ぜいふ會津侯ハ京都守護職を命ぜ
 られ一が時又天下多事よりして徳川の危急
 存亡の秋又て誠又幕府の事を會藩ふ依
 頼する姿あるに其時同氏も京師又出張
 せられたり一不程なく幕府ハ小出大和守
 を使節と一と歐洲又遣さんとせ一折々
 會藩ふて同氏を将来又望する人物ある
 を以て遂ふ幕府ハ請ふく大和守ふ隨

行せ一あり一ふ已に同氏ハ歐洲又航一普國
 赴き一時普國ハ澳國と征討するの時
 ともを其の出兵の模様等々目撃由夫よ
 り大和守と歐洲諸國と巡歴一共に帰朝
 せ一時ハ天下益乱れ遂又戊辰の戦争の
 り一が終又幕府降るも會津侯獨り官軍
 又抗敵する又際一同氏ハ日光口の總督と
 あり大鳥圭介等と共に數度の戦争又功を

顯あハ一いたるガ其その最ゆも著し一いきハ板垣退助
 の兵へいと攻撃こうげき一いたる軍器ぐんぎと云いハ働たきと云いハ
 敵てきも味方あつちも大おほ小こ感かんぜ一い程ほどふて板垣氏いたがきうぢも吾われ
 數度すうどの戦場せんばうと歴れき一いとゆんども未いまど今日けふの
 如ごとき困難こんなんの戦いくさひと為な一いたる事ことありと語かたら
 れ一いと亦また日光口にっこうぐちの戦いくさひ敗やぶを辛くるしみ一いて同氏どうぢを
 唯一ただひ人ひと遁のがれ一い生いき繁いりたる変畑かぎはたけふ入い一い時とき
 敵間てきま近く追迫おひせまり一い小同氏せうどうぢハ大膽だいたんふも来きら

を来きれ一い大手おほてと拳あがて差さ一い招まふおその大喝おほのうたい一
 声こゑ恰あたも雷鳴らいめいの如ごとくふるに僻易へきえき一いたりけん近ちか
 寄よる敵てきもるり一いと既すでに日光口にっこうぐち破やぶれて引揚ひきあげ
 る小本城せうほんぢやうハ官軍くわんぐん又また田たまも入いる可べき様さまありり
 一いが其時そのとき奇計きけいを用もちひ一方いっぽうと破やぶて入城いりやうぢ一い其
 後のち家老職けらうしやく又また登用とようさも本丸ほんまるの総督そうとくと任せら
 れ籠城らうじやう中ちゆうも功こうあり一いが戦いくさひ終おひる後のち同氏どうぢハ
 東京とうきやうへ護送ごそうされ禁錮きんこより居ゐり一いと會津あひづ



大分縣下
 小暴徒金
 の鯨鉾を
 奪むに

石田大守巳

十一編上



石田大守巳

家の家名再興の節許さきて權大参事と
ありその後陸軍裁判評事み任せられ
が佐賀の乱起るに及んず陸軍中佐に任せ
らま直に進んで一番は佐賀城み入られ
たりその時重創を受けらま其後非役
士官ありしが今回の戦ひ起るよ及んで亦
候戦地へ出張し亦も第一番は熊本城に
先登せらまし一ハ實は近世の美事にして

其名譽の聞え高かりしと云ふ

儲説去る九日十日に繰出せし兵は尤も海岸の固
とく函館小樽へ出兵之りあり残兵三百人餘
小樽表へ繰り込まれり又付陸軍の大佐兼開拓大
書記官堀基准、永山武四郎、同大尉門松經久、同
家村住義、同中尉税所篤彦同久保色直以下少
尉軍曹方及び開拓一等属、新納常隆、篠森泰
度、始り願ふより出陣の面々右兵隊を指

揮きいて小樽表へ押出おしだしたり此の日弾薬器械ひだんやくきと始はり荷物運送にものうんそうの人足市在ひとあしより俄と二千三百人と差さし出でし札幌さっぽろより小樽まで通とし人足ひとあしあり此の混雑こんさつの當地初はめくの支しまり且かつつ函はこ館くわんへ繰くり出いたる兵隊へいたいの函館丸はこくわんといふ蒸氣じょうき船せんふて一旦いつたん小樽へ引揚ひきあげ同所どうじよふて総隊そうたい一大隊いちだいたいより前書ぜんしょ役員方やくいんかた及び及び器械方きやくかた職人しやくじんあり此の小使等こつしどうまで附属ふぞくして出帆しゅつぱんを待まちりる但た

迎むかひ船せんとして玄武丸げんぶまるが小樽へ入港いりこう次第しだい乗り組くみむれの地方ちほうへも寄よらず直ちかち熊本くまもとへ向むかけて出帆しゅつぱんせる積つむりありと云いふ亦また大分縣おおぶんけんの暴徒ぼうとが起おこり立ち兼かねり此巨魁きよけいありこの増田まくだ宋太郎そうたろう。後藤ごとう俊平しゅんぺい。戸倉とくら千太郎せんたろう。山口やまぐち林造はやしぞう。櫻川さくらがわ正次郎せいじらう。清田きよた清香せいこう。其そのの外ほか数百人ひゃくにひゃくにん集あつまり小具足こぐそくと着ちかし又またハ替か替か古着こぎと着ちかし若わかあり暴行ぼうこうして本縣ほんけんハ勿論もちろん所々ところどころと乱暴らんぼうし此の時このとき

暴徒ハ九三十人ヨテ中津支廳へ押入り米山秋
太郎とひ者ハ縣官馬淵氏と堀氏と兩人深
手ト負せ金圓を奪ひ又縣令香川の郊へ火
と放ち辛くしてその場を退き同氏の奥方ハ
森下氏の内室と共山へ逃げかくれ跣足ヨテ
谷間を渡り險岨と越え夫の無事と祈り二日
ニ夕夜と凌がれ難く岡山へ逃げきとり
四月二日より村々へ一揆が起り同日より四日

までハ同所の士族が一トりこゝろず鎮静スルカ
とろ五日ふハ鎮臺兵が繰り込と始りて一
同安心せしが同所の博覧會へ廻りにあつたる
尾張名古屋の金の鯨鉾も既ニ此の時暴徒よ
奪りぬすの穴を掘り隠したるを早くも
暴徒ハ是を知り奪えんと押来りしに縣官ハ
横合より砲發して是を防ぎ直ニ船又積り
取敢ず大坂表へ廻さると此の暴徒ハ多

く生捕られたりしが中は別府新助の一手ハ
 鶴崎より出で内の牧より西郷の手へ廻りし者ハ
 實は一時の大變とありその後漸やくよして
 鎮定せし難澁の者どり政府より夫々御救
 助と成し下さし一同安心する事未だ日向
 路ハ鎮定するに鹿兒島へ追々兵隊ヲ繰り
 込之海岸より海軍の官兵鹿兒島へ上陸する
 や舊縣官數名と拘引して龍驤艦ヲ送致し

悉く糧倉ヲ撃ぎ兵隊警視隊の巡查とりつて
 一専ら哨兵巡邏と嚴ふたり亦兇徒ハ一時
 熊本城下と遁走し日向地方へ赴きたる兇
 徒ハ久しく嶮岨と據て固守をべき又再び
 兵を返して戦ふうと思惟せし果して兵と三
 分し各所は戦ひと始りありとあがり一手ハ
 八代口水股邊より出で戦ひ一手ハ大分縣下
 向つて既し同縣下の谷田の警察所及び區裁



千知木大
 尉危き苦
 難と道



判所と襲ひたりし又去る二月二十七日高瀬の
戦ひは近衛第一聯隊二番大隊の大尉千知木
氏の乱軍の中にて雲つく計りの大ひるる兎徒と
組打し互に負わず劣らず時移るまで檢合ひ組
合ひる居たりしが兎徒の力を優りけん遂に
千知木氏を其の場と組と伏既と危く死すと
ころに野上少尉の遙と是と見ると一目散と走
り寄りて上りる兎徒と引倒し難く首を

掻き切りたを千知木氏の幸ひみ辛き命を助
り同氏を二十六日の戦ひは兵卒は先ん敵中に
切て入り眉間その外は太刀疵を受け此の日を鉢
巻をとり出陣したる位なきを斯に危なき次
弟に至りしあり斯く野上少尉は千知木を助て
猶も進みしが終に弾丸の中りて戦歿し助けら
るたる千知木氏に弾丸の中りたきとも薄手にて
別條るうりしと抑近衛士官の戦死に野上氏を

始トめとて数名討死ありしとひ然る小野
 上氏出陣して留守を守り内室へ残る答の
 花一つ水あげ兼一風情ふて思安投首しるる
 計り又一日も早く凱陣を待ち日夜泣明す
 その折から陸軍少尉野上氏の討死されしと
 山口の遺髪を送られ城内室へ左又二歳よる
 藩士遺髪と送られ城内室へ左又二歳よる
 る男子抱き右又亡夫の遺髪を握りいと
 悲げ人目も憚くず泣の涙の流る計り

でえるその目りし心も消ひ思はず涙又られ
 たりとえて来しもの哀ありと鼻打かして吐
 せしよ

又四月三日よハ八代口堅志田の戦ひは逆軍ハ
 官軍の為め打ち破られ散々敗走する折
 柄十三四歳と覚しき少年が手疵を負ひ紅お
 の如く血又深く兄さんくと泣叫びし思ふ
 兄弟とも出陣し此敗軍に出合ひ兄ハ手

負ひたる弟と顧るるは眠るる終る捨走り
 一このまゝ又鏡村の戦争の時五十歳位の
 老人が十二三才の少年の肩に両手を掛けながら
 ら玉疵を負ふて死し居たる形勢の親子にて
 子に弾を中りたるを泣け寄て介胞する内は
 已由弾に中りて親子諸共死たるまゝ
 是等の逆徒ながらも最憫然の事にて見る
 りの覚えが涙を催す至まりと又甲佐の

戦ひ又国分権少警視が勇に進んで遂に討
 死せしと聞より川路少将の怒髪帽を衝き
 卒に吊ひ合戦せんと部下の将卒を率ゐて
 世に出けしを將校も兵卒も眼前味方の戦
 死と見えし事なれを同ト怒り堪へむして
 一歩も退らざると互ひに励まされ奮激突戦勇
 気日頃二十倍一撃手ども射もども事とも
 せず攻立けれを勝誇りたる薩軍も終る



鏡村の逆
 徒の親子
 兄弟戦死
 する

支へがごとく大崩おほくづより散々さんざん打うたされたり
 大将西郷隆盛さいきやうらうせいの此の戦いくさひ強評じやうへうして云ふは惣も
 て兵械へいきの我が軍士ぐんしを憤いきどおらまじりめざきを奇勝きせつ
 を得難えづきものより我が將しやうの討うつとつてい
 直ただ又盛返さかして得難えづき勝かつを奏そうまろ川路氏くわじち
 此の兵械へいきの能く圖づ中ちゆうれり故ゆゑるがら由よし天暗あふる
 りと讚うたたりいとぞ

亦西郷隆盛さいきやうらうせいの去さる十三日じふさんにち又三人引さんにんひきの人力車どんりきや

み乗り私学校しがく黨とうの生徒せいとの中ちゆうち三十人さんじゅうにんむりや
 前後ぜんご左右さゆう又従したがへる木山町きやままちの病院びやういんへ来きりて負傷てが
 者ひむとひ慰なぐさめ同所どうじよより矢部郷やべがう濱所はまじよの方かたへ行ゆ
 一ひとと此この吏しを認しんめし鹿兒木町かききまちより傷者てがの看けん
 護ごみ雇やこひきて居ゐる河野ふと女めと云いふ婦人ふとんが
 見みえたりとるひみ

四月二十日しがつにじゅうにち御船ごせん攻撃こうげきの節せつ我手わがてに大軍おほぐんひ
 たる兇徒きやうとの名簿なまほ熊本黨くまもととう本陣ほんぢん名簿なまほ

大隊長 池邊吉十郎 副隊長 松浦新吉

郎 参謀 緒方夫門 参謀 山崎定平 同大

里八郎 人吉 黨有志 出兵名簿

隊長 東九郎次 副新宮嘉善 軍監 瀧川

俊藏 半隊長 病氣 中村謹爾 半隊長 病

小付代人 寺田多澄 分隊長 那須克巳

分隊長 杉田利貞

俣も 逆徒の 尽く 林の中に 逃げ込めたるが 間も

く 数百の 援兵が 来りしと見え 逆軍の 忽ち 帶山

の 方より 取て 返し 官軍の 思ひも 寄らぬ所は 討

て 出られ 防戦も 行届く 見る間も 彼砲壘と

半數計り 取戻され 崩れ立ちたるが 漸くに 其の防

禦を ば 為したり けり 斯く 三浦少將の 手より 此

夜 兇徒 襲ひ 来りしが 翌 二十一日 曉より 遂に

之を 逐拂ひ たり 其後 兇徒の 本營と 日向國

高千穂 小据 たりと云ひ 諸口 共戦ひ 多く又

八代口の兎徒ハ佐敷を離る半里計りの所ニ嶮
 に據りて哨兵増加し数十名づゝ時々佐敷まで来
 り官軍の進退を探索するより又日奈久以南ハ山々
 峠迄残らず守兵と並ぶる所あり又矢部口ハ菅
 村まで逆軍進出するに付官軍ハ各所の兵備を嚴
 密に鹿兒島出張の兵ハ歩兵六大隊大砲八門工
 兵一隊と別働隊第一旅團ニ編制し高嶋少將
 之ガ司令長官とあり川村參軍大山少將ハ之ニ

督一同廿五日に高橋より軍艦艘數鹿兒島へ向
 て出帆し黒田參議ハ開拓の吏ニ從事せられどて
 參軍と辞さきたりと又兎徒ハ同日又悉皆人吉を
 指て退きしと抑矢部の地ハ四面山嶽を廻らして
 自然障を以て兎徒ハ兼て長トたり伏兵狙撃の策
 畧ニハ其地を得る如き故力攻めせば徒又兵を損
 ずることありんと官兵由輕拳せず斥候を出し
 款情を探り去る廿日より廿四日迄戦争及及び其

要地えうちを占めて官軍進撃しんげきせし甲斐かういもあつ各地くわちの逆兵さやくへい
一時いつし破れ逃のがれ遂つひに此こゝ舉あげ及およびしるらん其後そのち
人吉ひとよしは落集おちあまるのと抗撃かうげきの策さくを施ほすとも聞きひぬ
逆徒さやくと中成ちゆうあひ紛議まがぎを生うけて未いま何なにとも決けせざ
るが如此このごとの勢いきほひあるをまと振あらふべくもあらん
や

西南太平記十一編卷之上 終

010190507705

